

ひょうご

—神と伝—

伝説紀行

埴の里とはじか野村

大笑いした仲良しの神様

伝説

埴の里とはじか野村
大笑いした仲良しの神様

紀行

国造りをした神様のあしあと
 ・『播磨国風土記』を手に
 ・埴の里と初鹿野
 ・「ぬか」がつく地名
 ・揖保川・林田川の流域

関連情報

用語解説
 参考書籍
 所在地リスト

埴の里とはじか野村 大笑いした仲良しの神様

遠い昔のことです。播磨（はりま）の国に大汝命（おおなむちのみこと）と、少彦名命（すくなひこなのみこと）という二人の神様がいました。大汝命は体が大きくて、たいへん力持ちの神様でした。一方の少彦名命は、体は小さいのですが、すばしこくてがまんづよい神様でした。二人の神様はとても仲良しで、いっしょに播磨の国づくりをしていました。

ある日のことです。少彦名命がこんなふうに言い出しました。

「埴（はに：赤土のねん土のこと）の荷物を背負って歩いて行くのと、うんこをがまんして歩いて行くのと、どっちが遠くまで行けると思う」

「おれだったら、うんこをがまんする方だな」

大汝命は笑って答えました。

「じゃあ、競争してみるかい」

「ようし、やってみよう」



小さい少彦名命は、大きくて重たい埴を背負って歩きはじめました。あんまり重たいので、よろよろしています。それを見た大汝命は笑いました。

「荷物を持たないで旅をするのは、楽でいいもんだ」

少彦名命は、顔じゅうあせまみれになり、うんうん言いながら歩いています。一方の大汝命は、楽々と歩いてゆきました。

旅を続けて何日かたつと、少彦名命の顔はあせとほこりにまみれて、黒くよごれていました。もうへとへとです。ところがあれほど笑っていた大汝命も、まっ青な顔をして、あぶらあせを流していました。うんこをがまんするのが、苦しくなってきたのです。



神崎郡（かんざきぐん）についたころ、とうとうがまんしきれなくなった大汝命は、「もうだめだ」とさげんで道ばたの草むらにかけこむと、たまっていたうんこを、一気に出してしまいました。あまりの勢いに、うんこはササの葉にはじきとばされ、飛び散って石になりました。こういうわけで、うんこがはじき飛ばされたあたりのことを、初鹿野（はじかの）と呼ぶようになりました。

それを見た少彦名命も、「おれも、もうだめだ」と言って、背負っていた埴を道ばたに投げだしました。この埴も同じように固まって、石になりましたので、そのあたりを埴岡里（はにおかのさと）といいます。

「いや参った。本当に苦しかった」
大汝命がそう言って、大きなため息をつくと、少彦名命も「まったくだ、苦しかったよ」と答え、二人は顔を見合わせて大笑いしました。



埴の里とはじか野村 大笑いした仲良しの神様
おわり

紀行「国造りをした神様のあしあと」

『播磨国風土記』を手に

去年制作した、『ひょうご伝説紀行～語り継がれる村・人・習俗～』の中でも取り上げた「伊和大神」は、いろいろな顔を持っている神様だ。多くの解説書で、『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』の中に登場する伊和大神（いわのおおかみ）とオオナムチノミコトは、同じ神様だとされているようだし、アシハラノシコヲノミコトもそうであるらしい。記紀の記述からは「オオクニヌシ」という名もあてられるらしい。僕は神道についてはまったくの門外漢だから、一人の神様がこんなにたくさん名で呼ばれることが当たり前なのかどうかはわからないけれど、『播磨国風土記』の記事からすると、本来は別々の神様だったものが、朝廷によって神様の系譜が整理される過程で、次第にまとめられたような気がしてならない。ただ『播磨国風土記』では、そのまとめり方が不十分なのではないだろうか。

その当否はともかく、『播磨国風土記』には、オオナムチノミコトとスクナヒコナノミコト、この二人が国造りをした神様としてたびたび登場しているし、各地の神社にも祭られているのをしばしば見かける。風土記に登場する回数と内容からは、オオナムチノミコトの方が主役のようであるが、大小二人の神様に関する記事は、どちらかという土臭くて、整然と構成された神話というよりは、地域ごとに、人々の暮らしに根づいていた伝承という印象が強い。伝説のページで紹介した「埴の里」の話も、おおらかで素朴な笑いを伝える話である。

そこで今回の伝説紀行では、この二人の神様が関わった場所を訪ねてみることにした。播磨国の広い範囲に散らばっている伝承の地を、すべて巡るのはなかなか大変なことだが、何かの折ごとに訪ねてみるのも良いのではないだろうか。今回は、「埴の里」からの出発である。

埴の里と初鹿野



日吉神社（鳥居から）

「埴の里」の伝承地は、神崎郡神河町比延（かんざきぐんかみかわちょうひえ）にある日吉神社である。JR播但線（ばんたんせん）の寺前駅から、県道404号線を、1kmほど南へ下った所にある大きな神社が、日吉神社である。僕たちが取材に訪れた時は、ちょうど秋祭りの時期であつたらしく、たくさんの幟（のぼり）が立てられていた。

この神社の本殿裏に、スクナヒコナノミコトが担いでいた埴土から変わった岩があるとされている。そして、市川を挟んだ対岸に三角形の山容を見せる初鹿野山（はじかのやま）とその周辺が、オオナムチノミコトの糞（くそ）がササにはじかれて飛び散った場所だそうだ。

『播磨国風土記』の伝承では、この物語の後に、応神天皇（おうじんてんのう）がこの地を訪れて、「この土は土器作りに使える」と述べたので、埴岡という名になったとも記されているので、埴岡については二つの伝説が重なっているのかもしれない。実際には、この地に特に古代の窯跡が多いわけではないし、目立って埴輪が出土するわけでもない。今のところこの物語に、特別な考古学的意味を与えるわけにはゆかないだろう。ただ埴岡や初鹿野山は、市川と越知川が合流する地点に近く、ここから下流に向かって一気に平野が開けるから、位置的にも重要な場所と言えそうで、応神天皇がわざわざ訪れたという伝承も、こうしたことを背景にできあがったのではないだろうか。



日吉神社（看板）



祭の幟が並ぶ



日吉神社（境内）

「ぬか」がつく地名



粳岡（遠景）



粳岡（近景）

埴岡の里から12～3kmほど市川に沿って下った姫路市船津町八幡に、粳岡（ぬかおか）がある。ここは、伊和大神の軍勢がアメノヒボコノミコトの軍勢と戦ったとき、食事のために米をつき、その粳が集まって岡になったという。船津町八幡の集落を通る細い道を北へ抜けたところにある、竹藪におおわれた少し小高い場所なのだが、実際に行ってみると、「岡」という言葉から受ける印象ほど高くはない。ここから東へ2kmほど離れた、福崎町八千種は、アメノヒボコノミコトの軍勢が集結した地点ということになっているから、伊和大神の軍は市川を背に東に向いて、アメノヒボコノミコトの軍は山を背に西を向いて布陣したことになるのだろうか。

「ぬか」といえば、加西市網引町には糠塚山（ぬかつかやま）がある。加古川支流の満願寺川の南にある、標高150mほどの山である。一見したところは何でもない山なのだが、『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトが近くの村で米をつかせた時、その糠がこの山まで飛び散ったのだという。「米（稲）をつく」というおこないは、粳岡と糠塚山のほかにも何度も登場するが、単に食料としての米を精製するというこの他に、何か象徴的な意味があったのだろうか。それとも、米糠を盛り上げたようななだらかな山容から、古代の人たちが素直な空想をめぐらせたのだろうか。糠塚山の周囲に続く豊かな里山をながめながら、想像してみる。

加西市内には、他にもオオナムチノミコトゆかりの場所がある。豊倉町にあるフラワーセンターの、西に隣接する飯盛山もそうだ。『播磨国風土記』には、「オオナムチノミコトの御飯をこの山に盛った」と記されている。この文だけでは、オオナムチノミコト自身が食するご飯なのか、人々がオオナムチノミコトを祭るための祭事だったのかが分かりにくい。僕が参照した本では、後者の説を採っていた。そこから2kmほど南の牛居町（うしいちょう）は、風土記に見える、「オオナムチノミコトが碓（うす）を作って稲をついた碓居谷（うすいだに）」に比定されている。風土記にはほかにも、オオナムチノミコトの事跡と関連して箕谷（みのたに）、酒屋谷（さかやだに）という地名がみえる。これらの場所も加西市周辺にあったのだろうが、今の地名からその痕跡を見つけることはできない。



糠塚山と万願寺川



糠塚山（近景）

揖保川・林田川の流域

さて目を西に転じてみると、播磨西部、揖保川（いぼがわ）や林田川の流域にも、オオナムチノミコトを中心にした伝承地がある。

『播磨国風土記』には「御橋山」という地名が見えるが、これは現在のたつの市新宮町鯨崎（はしさき）にある屏風岩（びょうぶいわ）に比定されている。「オオナムチノミコトが俵を積み上げて橋にしたので、山の岩が橋に似ている」という伝承であるが、揖保川の対岸あたりからながめると、なるほど上流（北）に向かって順番に岩を積み上げたようにも見える。この岩の段を登って、神様が天に昇ったと考えたのだろう。



屏風岩（遠景）



天まで届く岩



峰相山（遠景）

揖保川下流域にはほかに、アシハラノシコヲノミコトがアメノヒボコノミコトとの国占め競争のとき、大あわてで食事をしてご飯粒をこぼしたという「粒丘（いいぼのおか：たつの市揖保町中臣）」、伊和大神がこの地方の国占めをしたときに、鹿が来て山の上に立ったことから名づけられた「香山里（かぐやまのさと：たつの市新宮町香山）」などがあるし、宍粟市（しろうし）にも、伊和大神やアシハラノシコヲノミコトにゆかりの地名などが点在している。



峰相山と麓の村

揖保川の東を流れる林田川流域にも、いくつかの伝承地が残っている。

姫路市伊勢にある峰相山（みねあいさん）は、中世の文献『峰相記』で有名であるが、『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとスクナヒコナノミコトが、埴岡の里にある「生野の峰」からこの山を見て、「あの山に稲種（いなだね）を置こう」と話しあい、ここに稲種を積み上げたので、山の姿も稲積に似ているとしている。「稲積」とは、刈り取ったままの、穂がついた稲だとされているが、どのあたりがそう見えるのか、現地立ってみてもよくわからなかった。それをどんなふうに積み上げたのだろう。

伊勢から林田川に沿って遡ると、昨年の伝説紀行でも取り上げた安師里（あなしのさと）に至る。ここでは伊和大神が安志姫命（あんじひめのみこと）に求婚し、容れられなかったので、石で林田川の上流をせき止めて、別の方へ流れるようにしたという。林田川の水量が少ないことを説明する伝説である。

国造りをした神様（たち）の足跡は、佐用郡、宍粟郡（しろうぐん）、揖保郡（いぼぐん）、神崎郡（かんざきぐん）、飾磨郡（しかまぐん）へと広がっている。今回の紀行ではまわりきれなかったが、『播磨国風土記』には、オオナムチノミコトが、乱暴者の息子ホアカリノミコトを捨ててしまおうとしてその怒りをまねき、船が難破してしまったという伝承もある。その遺称地は、姫路市街の西にいくつか比定されているし、姫路城が建つ姫山 風土記では日女道丘（ひめぢをか）としている の女神と、「オオナムチスクナヒコネノミコト」が契ったという記事も見える。



林田川の流れ



水は多くない



安志姫神社（鳥居）



安志姫神社（境内）



伊和神社の拝殿にとる灯



伊和神社
北側の参道

編まれてから1300年近くたつ『播磨国風土記』。このとても不思議な本を手に、いろいろな神様たちの舞台をめくっていると、播磨の古代史がおぼろげに見えてくるような気がする。

用語解説

伊和大神（いわのおおかみ）

宍粟市（しろうし）一宮町の伊和神社の祭神。大己貴神（おこなむちのかみ）、大国主神（おおくにぬしのかみ）、大名持御魂神（おこなもちみたまのかみ）とも呼ばれ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらのしこをのみこと）とも記されている。

播磨国の「国造り」をおこなった神とされており、渡来人（神）のアメノヒボコ（天日槍・天日矛とも書く）との土地争いが伝えられている。

風土記には、宍粟郡から飾磨郡の伊和里（いわのさと）へ移り住んだ、伊和君（いわのきみ）という古代豪族の名が見えることから、この伊和氏が祖先を神格化した神と考えられている。

なお、伊和神社の社叢（しゃそう）は、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』の自然景観でBランクに選定されている。

播磨国風土記（はりまのくにふどき）

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

オオクニヌシ（おおくにぬし）

記紀神話に登場する神。大国主命（おおくにぬしのみこと）。『日本書紀』ではオオナムチノミコトと同一神とされ、『播磨国風土記』では、葦原志許乎命（あしはらのしこをのみこと）、伊和大神と同一神とみなされているようである。オオクニヌシは、スサノオの子とも六世あるいは七世孫ともされ、出雲神話の祖となっている。

スクナヒコナノミコト（すくなひこなのみこと）

記紀や風土記に見られる神。『日本書紀』では少彦名命（すくなひこなのみこと）、『古事記』では少名毘古那神（すくなびこなのかみ）。『播磨国風土記』では、オオナムチノミコトとともに国造りをおこなったとされている。道後温泉や玉造温泉などを発見したと伝えられ、温泉開発の神としても祭られる。『古事記』によれば、少彦名命は、天之羅摩船（アメノカガミノフネ：ガガイモのさやでできた船）に乗り、蛾（が）の皮の衣服を着て出雲国にやってきた小さな神とされており、民話「一寸法師」の原型とも言われている。

日吉神社（ひよしじんじゃ）

神崎郡神河町比延（ひえ）に所在する神社。祭神は大山咋神（おおやまくいのかみ）、オオナムチノミコト、スクナヒコナノミコト。『播磨国風土記』の、「埴岡里」の伝説に関係がある神社といわれる。（『兵庫県大百科事典』下）

初鹿野山（はじかのやま）

神崎郡神河町に所在する山。標高は507.8m。初鹿野の名は、『播磨国風土記』の中の「波自加（はじか）村」に由来する。

用語解説

応神天皇（おうじんてんのう）

『日本書紀』によれば第15代の天皇。仲哀天皇（ちゅうあいてんのう）の皇子で、母は神功皇后とされる。名は誉田別命（ほむたわけのみこと）。記紀によれば在位は41年で、西暦310年に111歳あるいは130歳で没したとされる。伝説的色彩の強い天皇であるが、『宋書』の東夷伝に見える倭王讃（さん）を、応神天皇にあてる説がある。陵墓は大阪府羽曳野市（はびきのし）に所在する、誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）に比定されている。誉田御廟山古墳は、全国で第2位の、全長425mを測る前方後円墳で、築造は5世紀前半と考えられている。

アメノヒボコノミコト（あめのひぼこのみこと）

天日槍・天日矛とも書く。またアメノヒボコともいう。

記紀や『播磨国風土記』などに記された伝説上の人物。新羅の王子で、妻の阿加留（流）比売（あかるひめ）を追って日本に来たという。その後、越前、近江、丹波などを経て但馬に定着し、その地を開拓したとされている。出石神社の祭神。

加古川（かがわ）

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1,730平方キロメートルを測る県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川 - 由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

峰相記（みねあいき）

1348年ごろに著された中世前期の播磨地方の地誌。著者は不明である。播磨国峯相山鶏足寺（ぶしょうざんけいそくじ）に参詣した僧侶と、そこに住む老僧の問答形式で著されている。日本の仏教の教義にはじまり、播磨の霊場の縁起、各地の世情や地誌などが記されている。安倍晴明（あべのせいめい）と芦屋道満（あしやどうまん）の逸話、福泊築港、悪党蜂起の記述など、鎌倉時代末の播磨地域を知る上で重要な記録となっている。最古の写本は、太子町斑鳩寺（はんきゅうじ）に伝わる1511年の年記をもつもの。

たつの市（たつのし）

兵庫県の播磨地域西部に位置する市。市域は、南北に流れる揖保川（いぼがわ）に沿って広がり、南は瀬戸内海に面する。平成19年11月現在の人口は、約82,000人。風土が生み出した手延素麺（てのべそうめん）や醤油醸造、皮革産業、かばん産業といった伝統的な地場産業で知られる。市街の中心には、龍野城がある。

安師里（あなしのさと）

『播磨国風土記』に記された里の一つ。現在の姫路市安富町の安志付近に比定される。里名の起源は安師比売神（あなしひめのかみ：安志姫とも表記する）による。『播磨国風土記』によれば、安師比売が伊和大神の求婚を断ったことに怒った伊和大神が、林田川の源流をせき止めて流れを変えてしまったため、水量が少なくなったという。

用語解説

ホアカリノミコト（ほあかりのみこと）

『播磨国風土記』によれば、オオナムチノミコトの子であるが、記紀ではアメノオシホミミとヨロヅハタトヨアキツシヒメとの子とされている。『播磨国風土記』によると、あまりにも乱暴な子であったため、オオナムチが船に乗せて出航した際、立ち寄った場所に置き去りにしようとした。これがホアカリノミコトを怒らせ、海が荒れ狂ったため船は難破して、オオナムチは非常な難渋をしたという。

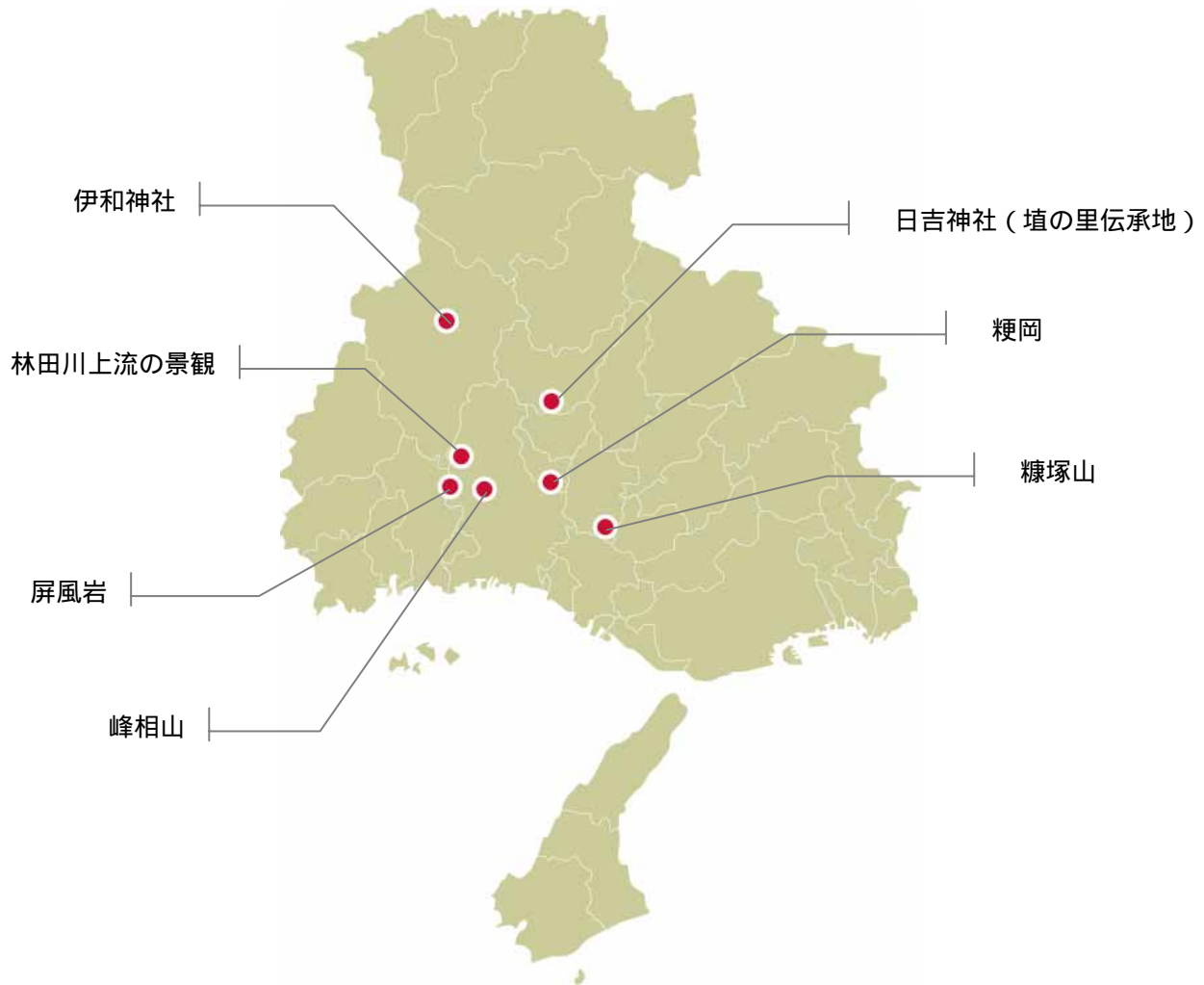
日女道丘（ひめぢをか）

『播磨国風土記』に記された丘の名。現在の姫山に比定されている。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	郷土の民話中播篇	1972	郷土の民話中播地区編集委員会	兵庫県学校厚生会
歴史・文化	日本古典文学大系2 風土記	1958	秋元吉郎 校訂	岩波書店
	日本古典文学大系67 日本書紀 上	1967	坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩3 西播編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	日本思想体系1 古事記	1982	青木和夫・石母田正・佐伯有清 校訂	岩波書店
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	風土記の考古学2	1994	榎本誠一編	同成社

所在地リスト



伊和神社	宍粟市一宮町須行名（すぎょうめ）
日吉神社（埴の里伝承地）	神崎郡神河町比延245
林田川上流の景観	姫路市安富町塩野（植塩橋付近）
屏風岩	たつの市神岡大住寺字大源寺249-6
峰相山	姫路市石倉
稷岡	姫路市船津町2705
糠塚山	加西市網引町・小野市西脇町

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第2刷 2009年4月1日